# *Voir* と「見る」に於ける知覚動詞の多義に関与する異質的要因の研究（第二部）

伊　藤　達　也

## 0．はじめに

第一部では、日本語の「見る」の多様な用法の中に共通する意味的な同一性を、パラメターの束であるFS（forme schématique：スキーマ形式）として表し、そこにパラメターの質的な色付けを行う周辺的語彙要素（co-texte、語脈）とFSの布置の変形をも含みうる統語的要素という異質的要因が複合的に影響を与えることにより、意味的な多様性を生み出していると主張した。

日本語の「見る」の本動詞（～を見る、「視覚を通じて外界の事物を捉える」の意）および補助動詞（～てみる、「試みる」の意）に共通するFSとして、「表象が発話主体Sとは独立して実現化する」ことを仮定した。この定義は「見る」のあらゆる使用を超越し、脱意味論化されている。そのため、「芝居を見る」、「京都を見る」、「湯加減を見る」、「味を見る」、「話しかけてみる」など、この語の様々な使用において実際に感じられる具体的な「意味」とは直接的には対応はしていない。言表の中に現れた「見る」は何らかの意味を構築するが、それは周辺に存在する語彙、および統語的な役割との相互作用の結果として生み出されるのであり、語彙論で言われるように「見る」に内在するいくつかの意味のうちの一つが顕在化するというわけではない。FSは多義を説明するために導入された作業仮説だが、

普段我々が意味という言葉で思い描く心的表象には相当せず、その上位の最も形式的かつ抽象的な心的オペレーションのレベルに存在しているのである[1]。

この第二部では、日本語の「見る」としばしば語彙的等価と見なされるフランス語の *voir* を取り上げ、この後者の振る舞いの記述に日本語の「見る」で得られた結果が部分的に利用出来る事を示す。当然ながら、日本語とフランス語は類型論的に大きく異なり、祖語を同じくする訳でも、接触により大規模な借用が生じたわけではないので、対照される両マーカーに共通点があるとすれば、より普遍的な人間の言語活動の共通点に基づくことが予想される[2]。

## 1.1. 語の歴史

フランス語の *voir* は RDHLF（*Le Robert Dictionnaire Historique de la langue Française*）によると：*veder*（980），*vedeir*（1080），*veeir*（1080），*veeir*（1155）と姿を変えながら、*veoir*（1200）へと歴史的に変化した。*Veoir* は1671年まで存在が確認されている。語源はラテン語の絶対用法および他動詞用法を持つ *videre* である。*Videre* は「視覚により何かを認知すること」、「～に面する」、「その場に居合わせる」、「気づく、判断する」という意味を持っていたことが確認されており、この動詞はラテン語においてもすでに、「想像する」、「慧眼を持つ」、「判断する、検討する、決定する」、「～が出来るよう方策を講じる」などの比喩的な解釈を許していた[3]。

また *videre* は印欧語の語根 *weid*－に繋がっており、この語根には、知識に役立つ視覚という意味しかなく、視覚によって知覚するという意味は二次的でしかなかった。

*Weid* からはギリシア語の *idein*（見る／見た、*hôran* のアオリストの不定形）が生まれ、この語からは *idée*（*idea*（英）アイデア、想念）という語も派生した。また獲得された結果を意味する *Weid* の完了過去は、サンスク

リットの *véda*（私は知っている）、ゴート語の *wait* なども同様「知ること、知識」を意味した。

印欧語には視覚を意味する三つの語根があった。見る行為そのものを意味する *derk-* はラテン語には残らなかったが、ギリシア語の *derkesthai*（アオリスト *edrakon*）を生じた。他の二つは *specere*、およびフランク語の *spehôn*（観察する、*épier*（こっそり見る）を派生）の中にある *-spex*（*espèce, spectacle* を派生）にある語根 *spek-*（瞑想する、観察する）、もう一つは、*oculus*（目）、ギリシア語の *ops*（視覚、*optique* を派生）にある *okw*－である。

現代フランス語で *voir* と比較の対象になる *regarder* の歴史も、RDHLF に依拠しながら一瞥しておこう。「テレビを見る」場合は *regarder* を使うが、上で印欧語の三つの語根に含まれないことからも明らかなように、*regarder* の語源はラテン語には存在せず、フランス語になって「～についての目を持つ、眺める」という意味を持っていた *garder* に、くり返しないし強調を意味する接頭辞 *re-* をともない作られたゲルマン系の語彙である（1080）。それ以前の時期には、*reswarder*（980頃）が見られ、ここから *resgarder*（1175）が派生している。*Reswarder* は *eswarder, esgarder, égarder*（980頃）に接頭辞がつく事から派生したが、もともと *garder* からの派生である。これ自体、名詞の *égard*（考慮）を生んでいる。

ちなみに、現代フランス語にも残る *garder*（番をする、見張る、保存する、保つ、維持する）はゲルマン系の語彙 *wardôn*（～の方を見る）古高ドイツ語の *warten*（見る、世話をする）、中世オランダ語の *waerden*（気を配る、注意深く見守る；しないように気をつける、用心する）に由来する。ドイツ語の *warten*、英語の *ward* も同根であり。元は印欧語の語根 *swer*（*ser, wer* の異体もあり）にさかのぼる。この語根はギリシア語の *horan*（見る、監視する）、ラテン語の *vereri*（恐れる、尊敬する）等とも関係を持つ[4]。

他のロマンス語には残存する *garder* の語源的な意味「見る」は現代フランス語では失われている。歴史的に *garder* は *esgarder* に取って代わられ、次に *regarder* に置き換わった。同時に、「見張りをする」「世話をする」と

いう意味の側面が *garder* の「保存する」、「観察する」、「何かが尊重されるように見張る」という意味として発展した。「テレビを見る」場合に re-garder を使うのは語源的意味のなごりであると考えられる。

語源的な情報で興味深いのは、現在我々の知る単語が過去の意味を受け継いだり、過去において他の語彙と競合し、ある意味に特化して行く過程をたどり直すことが出来る点である。印欧語の場合は、地理的、歴史的にヴァリエーションが広いため、語根の再構成とともに、様々な意味の歴史的変化を目の当たりにすることも出来る。

しかしながら、近代言語学は、自然言語を共時的な構造体として捉え、この内部構造の説明を目的とする。事実、日本語の「見る」は、フランス語で、ある場合には *voir* で、別の場合には *regarder* で表現され[5]、この事実には何らかの対立が反映されていると考えられるが、その対立は、語源的な対立ではなく、共時的な構造的使用域の対立に対応している。本論は語源的な情報を加味しながらも、あくまで *voir* の共時的な意味と統語的広がりの中で、その多様性を統括する規則性のメカニズムを解明することを主題とする。そのためには、語源情報よりも現代フランス語の共時的な体系内で使用される *voir* の様々な使用と様々な意味、および出現環境を検討することが重要である。

### 1. 2. *Voir* の様々な意味

*Voir* は日本語の「見る」以上に使用範囲が広く、他動詞だけでなく、自動詞（日本語の「見える」に相当）用法、代名動詞用法、および前置詞 *à* を義務的に伴う用法を含んでいる。この多様な使用に対応する意味を日本語の動詞で（あるいは時によっては助動詞、複合動詞を総動員し）置き換え、提示して行くことは、*voir* の本質的な同一性に到達するよりも、むしろその周りを迂回させ、表面的な類似に目を向けさせ、錯誤を生じさせる結

果を生むであろう。したがってむしろここでは、別のやり方で多様性と統一性を提示する試みを行おう。

本稿では FS が意味の多様性を生み出す要因に統語要因とコテクスト要因があるという作業仮説を立てる。したがってまず、使用される統語的違いを区別する。以下の４種類の区別は、辞書類の中で統語的分類の最もすっきりしていると思われる *Nouveau Petit Robert* の区別に基づく[6]。(()内は初出年。「」内はおよその意味。)

Ⅰ. 自動詞用法. (1080年)「視覚を通じて物体の映像を知覚すること」。
Ⅱ. 他動詞用法. (980年)「目によって（何かを）知覚すること。」
Ⅲ. *voir à* の形で.「～を配慮する」の意味。
Ⅳ. 代名動詞 *se voir* の形で。１.(再帰)「自己の映像を見る」、２.(相互)「互いに会う」、３.(受動)「～される」、「～できる」[7]。

初出からも理解されるように、最も根本的な *voir* の用法はⅡの他動詞用法であり、ⅠはⅡの特別なケース（目的語を明確にする必要のない場合）であると理解される。この事はⅠに属する以下の例からも納得されるであろう。

(1) Mettez vos lunettes pour mieux voir.
（よく見えるように、眼鏡をしてください。）
(2) Tu a trop vu, tu vois double.
（君は飲み過ぎだ、物が二重に見えるんだ。）

(1)－(2)の場合、何を見るかは目的語として明確にされていない。この文脈では「目で外界（のイメージ）を認識する」ことだけが、重要であり具体的に「何を」認識するかは問題にする必要がないからである。したがって、表面的には自動詞用法だが、見るという行為において、対象がな

いということは考えにくい。「見る」の場合、あるいは日本語でこの用法に近い「見える」の場合、「何かを見る」、「何かが見える」のだが、この自動詞用法では目的語に当たるのは「目で見ることが出来る物全て」であるために、目的語として明示されないのである[8]。

自動詞的と分類される例では、別の意味で以下のような例がある。

（3）On verra.（Nous verrons.）
（そのうち分かるだろう）

この場合、「見える」よりも「理解される」「分かる」という意味になるが、動詞が未来形に置かれていることから分かるように、何を理解するか、分かるのか、発話時点では生じていないので、言葉で表現できない。日本語の「見る」に「分かる」を意味する使用はないが、英語の *I see* が「分かる」の意味で使われるのと同様、フランス語でも「見る」が「分かる」に通じるのである。以下の例を見よう。

（4）Vous voyez ce que je veux dire?
（私の言いたいことが分かりますか？）

この例では *voir* の意味は上とほぼ同じだが、目的語 *ce que je veux dire*（私の言いたいこと）が明示されている。これはしかし、発話者の心の中に思い描かれた意図であり、目には見えないものである。この目的語の性質により、目に見える目的語をとる場合とは異なり *voir* は「見える」という意味を構築せず、「表象が形作られる」という意味での「理解する」を意味するのである。つまりフランス語の *voir* の「分かる」とは、何かについて表象が獲得されるということなのである。

したって、Ⅰのケースであっても、Ⅱのケースのように *voir* は本質的には、統語的に他動詞、つまり、目的語を必要とし、この目的語が *voir* の意

味構築にとって最も必要なコ（ン）テクストであることが理解される。

Ⅱの他動詞用法では、明示的な目的語の介入により、意味のヴァリエーションが展開される。しかもその多様性は、離散的ではなく、連続的につながっていると考えられる。次の例から見てみよう。

（5）Les aventuriers ont vu la mer Pacifique.
（冒険家たちは太平洋を見た。）

この例では目的語 *la mer Pacifique*（太平洋）が明示されている典型的他動詞用法である。Ⅰの自動詞用法とは異なり、目的語で表される対象の映像を知覚的に把握したという意味である。この用法は、日本語の「見る」でも見たが、知覚するだけでなく例文(6)－(7)のように「その場に居合わせる」、「証人となる」というニュアンスを強く持つ。

（6）J’ai vu tuer Ben Barka.
（私はベン・バルカが殺されるのを見た）
（7）Voir Naples et mourir.
（ナポリを見て、死ね）

*Voir* はまた、が日本語の「見る」では表現しにくい以下のような使用も可能である。

（8）Ma future maison, je la vois en Italie.
（私は将来イタリアに居を構えようと思う）

ここで *voir* することとは、イメージすること、つまり表象レベルの活動にとどまっている。現実に存在する対象だけでなく、*ma future maison*（将来

の家）のような、まだ存在していない家を目的語に取る場合、日本語では「見る」を使用することは難しい「？？将来の家を（が）、私はイタリアに見ている（見えている）」。フランス語では純粋に表象レベルでの「思い描く」という行為にも *voir* が使用出来るのである。もちろんこれは、*ma future maison* という目的語が、*voir* の解釈に影響を与えているためである。

## 2. 1. Voir の FS

以上の例から理解されるように、フランス語の *voir* は主体 S 内部での発話時 To における表象の形成と関わっている。*Voir* は S が目的語として導入される対象 X の表象（représentation）を構築することを意味する。逆に言えば、世界の断片である X は S にとって、To における代理／表象／記号の物象化（あるいは現物化されたもの）でしかない。S は発話時 To に X を直接把握出来ず、その表象（イメージ、画像）を獲得するのみなのである。この事物 X を代理するイメージの獲得こそが *voir* の本質的意味機能である。

以上を踏まえ、*voir* は以下の一連の心的操作を表わすと考えられる[9]。

- 主体 S は、発話時 To において、言語外的対象 X の表象 r を構築する。
- 動詞の直接目的語として提供される X は S にとって常にアクセス不可能であるが（故に）、その代理として S は To においてのみ有効な表象 r（X のイメージ、映像）を構築する。また X は S にとって表象 r の物象化として発話時 To に存在する。

この定義から分かるように *voir*（見る）は一時的な現象（発話時 To においてのみ有効）であり、この点が時間的な持続を含む *regarder*（眺める）との相違点となる。いくつかの例に現れる *voir* の「現場に居合わせる」、「証人となる」というニュアンスは、To（発話時）にのみ有効であることに由

来する。見る行為は、発話するときにのみ一次的に有効な瞬間的な表象活動なのである。

S と対象 X との関係も *voir* においては特徴的である。S は X にアクセス出来ず、To においてその代理を心理的にこしらえる。それが表象 r である。したがって対象 X は S にとって代理（表象）可能なものでなければならない。この間接的認識も *voir*の特徴である。「想像する」、「思い描く」という意味はこの表象に X を置き換えるという表象活動に由来する。この代理／表象が*regarder*では介在しないため、*regarder*という行為はより現実主義的なのである。

対象が S の表象活動を活性化することは、他の知覚動詞でも見られるが、知覚の場合の特異性は、外部に厳然として対象 X が存在しているものの、それは To 時に表象が物質化（matérialisé）されたものにすぎないということである。*Voir* においては、S と X の間に、映像が媒介する。この映像こそが表象なのである。X は S にとって、表象としてつまり映象として認識されるものである。*Voir* はこの間接性のために、五感の中で、音でも匂いでも味覚でも手触りでもなく目で見る行為に結びつけられることが多いのである。

日本語の「見る」に比べて、*voir* には「推移」の要素は顕在ではない。フランス語の *voir* ではむしろ、To 時における S と X との表象関係を築くことを規定している。

また同時に指摘出来るのは、S の受動性である。これは、第一部で日本語の「眺める」と比べ「見る」ことに関して、S の対象に対する二次性として規定した性質と共通する。仏語でも *voir* は、*regarder* と比べ、S の二次性が顕著である。語源的にも *regarder* は「警備する」を意味していたように、S の一次性（主導性）を強調し、S と対象 X との間に表象が確立する間接性を認めない[10]。

補足的に言えば *voir* ないし「見る」ことから得られた知識は概念と関連する。その意味で「見る」ことから得られる知識は、経験ではなく、経験

が代理／表象されたものの情報的な抽象的体系なのである。

## 2. 2. *Voir à, se voir* の場合における FS の展開

### 2. 1. 1. *Voir à*

前置詞句を伴う *voir à* の場合、単独で使用される場合とは、意味が質的に異なってくる。以下の例で確認しよう。

(9) Il faudrait voir à ne pas être trop naïf dans le commerce.
（ビジネスではあまり純情すぎないように注意しなければいけない。）

(10) Nous voulions continuer à nous voir à garder le contact.
（私たちは、私たちと接触を持ち続けるようにして欲しい）

ここで、*voir à* V の意味は、以上の例に見られるように「～するように取りはからう」「注意する」であり、何らかの視覚および認識に関連づけられる意味はほぼ完全に書き換えられている。*Voir à* の場合は前置詞が動詞の FS に組み込まれ、FS の「かたち」を変形している場合と考えられる[11]。この意味のヴァリエーションは前置詞句の FS への多大な介入に由来する。したがって、*voir* の FS の延長でそれを説明するのは難しくなる。成句化が生じているのである。

### 2. 1. 2. *Se voir*

*Voir à* の場合とは異なり、*se voir* は *voir* の意味論と代名動詞の意味論とが組み合わさっている。意味としてはフランス語の代名動詞の意味区別に応じて、再帰的意味、*je me vois dans la glace*（私は自分の姿を鏡の中に見る）、

相互的意味、*cela fait longtemps qu'on ne se voit pas.*（長い間お互いに会っていなかった）、受動的意味を持つ *un film qui se voit avec plaisir.*（楽しんで見られる映画）が存在する。

これらの例では、他動詞用法で確認した *voir* の「見ること」を中心とした意味の核に、代名動詞の３種類の意味が付け加わったにすぎず、予想可能である。*Voir à* の場合と異なり、代名動詞の用例では、se の付加は、*voir* の FS を変形していない。

## ３．結論

本稿では *voir* の意味を FS という抽象的なパラメターの束として捉え、この語彙的まとまりの意味の広がりやニュアンスを説明する試みを行った。しばしば比較される *regarder* との違いもこの FS に即して理解することが可能であり、また他の語彙的ないし統語的要素も様々にこの語の意味的ヴァリエーションに関係することも示した。今後はデータと観察を増やす事により、ヴァリエーションの種類の特定をより緻密にしていくことが課題となるであろう。

## 注

1　Culioli が繰り返し語るレベル１、レベル２、レベル３という分類を思い出そう。（Culioli1990－1999）簡単に言えば、レベル１は心的オペレーションレベルで「アクセス不可能」、レベル２がテクストのレベル、レベル３が言語学的なメタ言語のレベルである。FS はレベル１に属すると考えられる。

2　共通の祖先を持つ二あるいはそれ以上の言語を比較する、比較言語学では、比較により祖語を再構築したり、その拡散の様子をたどる事が主要関心事となる。本論はこれと異なる対照言語学的アプローチを採用する。すなわち、お互いに自然言語（langues naturelles）であるという以外は共通点のない日本語とフランス語を対照させることを通じて、より人間の言語活動（lan-

gage）の普遍的な部分に接近しようと試みるのである。

3　Le verbe est issu du latin *videre,* construit absolument ou avec un accusatif et signifiant <<percevoir qqn, qch. par la vue>>, <<donner sur>>, <<être témoin de, disposer de>> et << remarquer, constater>>; le latin avait aussi plusieurs acceptations figurées : <<imaginer>>, <<avoir de la clairvoyance>>, <<juger, examiner, déterminer>>, <<prendre des mesures pour, pouvoir à>>.(RDHLF)

4　英語を通じて日本語にも流入した *garde*（ガード・レール、ボディ・ガード、ガード・レール、ガード・マン（和製英語、英語では *gateman*））「保護」「防御」「監視」も語源的には *garder* 同様「対象を注意深く見る」ことから派生している。

5　英語ではおよそ *look* (*see*) / *watch* の対立に相当する。仏語で *regarder* を使い、*voir* を使わないテレビを見る場合、英語では *see* でも *look at* でもなく *watch* を使うが、watch は語源的にも、単独では（変化が期待されるものを）「監視する」「警備する」を意味する。仏語では映画を見る場合、*regarder* ではなく *voir* を使う点も英語の対立と類似する。

6　*NPR* 1 はこの順序で 4 種類の用法を分類している。

7　再帰、相互、受動は se＋動詞の代名動詞としての意味論に由来する。従って「」内の意味は、中動態であることと動詞 *voir* の意味論との相乗効果から生み出されて言えると考えられるが、詳しくは後に議論する。

8　強いて言えば、(1)では *ce que vous voyez*（あなたの目に見えるもの）、(2)では *ce que tu vois*（君の目に見えるもの）が目的語として暗示されている。

9　Franckel & Lebaud（1990）は知覚動詞の一つとして *voir* を記述するが（ibid, pp. 57－69）、*entendre* との対比から同一性を規定するアプローチがとられているため、*voir à* および *se voir* は記述の対象になっておらず、*voir* のいわゆる「見る」という意味のみが問題となっている。本稿ではこの仕事を踏まえながら、*voir* の意味のヴァリエーションを記述することを目的に据え、そのためにこの語の同一性を可能な限りの用法と意味の多様性の中でヴァリエーションへ貢献する諸要素の一つとして把握しようと試みている。

10　Ça ne me regarde pas.（文字通りは「それは私を眺めない」転じて「それは私には関係ない」）という言い方があるが、この場合も Ça と me の直接性があってこそ可能な表現である。

11　*voir à* という場合、*à* の後に動詞の原形が来る場合のみを扱い、以下のような前置詞句が現れる場合は除く。*Voir à la télévision…, voir à mes yeux qch.* これら

の場合は *voir* と *à* が分離可能であり *à* による *voir* の書き換えは起こっていない。

## 参考文献


Culioli, A.（1990－1999）*Pour une linguistique de l'énonciation I - III,* Ophrys, Paris.

Franckel, J.-J. & D. Lebaud（1990）*Les figures du sujet, A propos des verbes de perception, sentiment, connaissance*, Ophrys, Paris.

Rey, A. ed. (1992) *Le Robert Dictionnaire historique de la langue française,* Robert, Paris.

Rey, A. ed. (1993) *Le Nouveau Petit Robert*, Robert, Paris.